

明末清初天童密雲圓悟禪師の法嗣間における諍論

——特に『費隱禪師別集』における木陳道忞に対する費隱通容の批判に注目して——

胡 建 明

一 はじめに

陳垣（一八八〇～一九七二）が『明季滇黔仏教考』に記したように、明末清初の僧諍（仏教内部の諍論）は明末臨済宗天童派密雲圓悟（一五六六～一六四二）と、三峰漢月法蔵（一五七三～一六三三）の師弟の間から始まったといえよう。⁽¹⁾ また『清初僧諍記』巻二「天童派之諍」の中でも天童塔銘に記した二度の諍論に言及している。そして、その第一回目は天童密雲の法嗣の間、とりわけ費隱通容（一五九三～一六六一）による同門の木陳道忞（一五九六～一六七四）への猛烈な批判といえるが、第二回目は木陳道忞とその法姪繼起弘儲（一六〇五～一六七二、同門の法蔵の法嗣）の間に行われた論争である。

陳垣の上記二つの名著の発行から既に半世紀を過ぎたが、しかし今でもなお、これを超えた研究論考は見られない。花園大学教授の

明末清初天童密雲圓悟禪師の法嗣間における諍論

野口善敬がかつて『清初僧諍記』を訳し、また漢月法蔵の研究については、台湾の連瑞枝、聖空に若干の論考があるのみであり、その辺りのテーマは殆ど着目されていないのが、今日の学界の現状である。⁽³⁾

しかしながら、陳垣が木陳への費隱の批判を論ずるのに援用した文献は『費隱禪師語録』第十一卷等のみであり、『費隱禪師別集』の内容には言及されなかった。⁽⁴⁾ これはあるいは彼がその当時にこの書物の存在を承知していなかったためかもしれない。それは清の順治四年一月十五日に、天童山住持費隱が刻版付梓したものである。

『費隱禪師紀年録』巻下の記載によれば、費隱は順治三年丙戌十月十一日に木陳の後に天童山に晋山を果たした。この版本が、後に中国で散佚したかどうかについては、なお今後考証を要する。

本稿で使用した資料はすなわち最新の文献資料としての『費隱禪師別集』であり、大正十三年八月に曹洞宗大学から抄録したもので、現在駒澤大学図書館が所蔵する。その書物の巻十五所収の『説木陳

欺天童老和尚』、『撃木陳妄代天童老和尚付法』、『榜法堂語』、『啓告同門語』という四篇が対象であり、いずれも木陳への批判文である。これをもって、費隱が如何に同門の法弟木陳道忞⁽⁵⁾を酷評したのかを明らかにする。さらに明末清初の間に天童密雲圓悟禪師の法嗣の間に行われた壮絶な骨肉の争いの内容を解明しながら、当時天童山における内訌の裏に映された複雑な社会的背景と、寺院と政治との絡み合いを論じてみたい。

二 明末天童密雲圓悟とその門派

明末の萬曆、天啓、崇禎の三朝は、おおよそ七十一年間（一五七三～一六四四）である。その間政治制度は徐々に緩みつあつたが、社会における経済、文化、そして民衆の生活面などにおいては、なお表面的な繁栄ぶりを維持していた。

また西洋の科学技術や文化と宗教も次第に当時の中国社会に滲透してきたために社会・政治にも大きな影響を与え、都市化とともに経済の商業化も進んでいた。よって従来の社会的価値観も変わり、個人の自由を要求する風潮が現れると同時に、市民文化も空前の発展を遂げた。こうした伝統への批判と近代化への指向ともいえる変革という時代風潮において、思想界と宗教界にも多元化及び近代化への兆しが見られた。当然ながら、仏教界においても例外ではない。

しかし崇禎朝の時代に入ると、満州族の侵入によって明王朝が遂

に滅亡し、こうした近代化への進展が満州族の蹂躪によって止められた。

清の初期における厳酷な独裁政治の下で、民族の衝突が激化し、中国思想界、文化界の文人・士大夫が深い苦悩と悲痛に陥った。明国に対する忠誠を守り、清王朝に協力しないという態度を特徴とする遺民たちと、その反対に清王朝に投降して、変節して異民族に従順するという態度を特徴とする貳臣たちの間の対立が見られる。これは明末清初の変革期における思想界の主要な特質である。仏教界も勿論深く影響を受けた。

密雲の門下の紛争も、こうした時代背景や政治的要因、乃至各自の在俗勢力と支持層によって生じた産物である。いわゆるこうした王朝交代に伴う特殊な変革期における思想界、宗教界から発生した一種の不協和音とも言えよう。

明末の仏教界において、とくに禪宗では、大きな時弊を露呈した。それについて、忽滑谷快天の『禪宗思想史』下巻ではこの時代を「禪道変衰の代」と定めている。

明末の禪宗の主張は、おおよそ三つに分類される。すなわち一つは、法系伝承不明の憨山德清（一五四六～一六二三）や、紫柏真可（一五四三～一六〇三）等の僧である。彼らは「藉教悟宗」を唱えた。つまり教を以て禅を行い、教禅融合の思想を持つ一派である。二つは永覺元賢（一五七八～一六五七）、晦臺元鏡（一五七七～一六三〇）、無異元來（一五七五～一六三〇）を代表とする曹洞宗の僧であり、

文字や知解によらず、宗門の規範と坐禪を重視することを主張する一派である。三つは、天童密雲圓悟、三峰漢月法蔵等を代表とする臨済宗の僧たちであり、従来の祖師禪を堅持し、見性を目的とした修行を主張する一派である。

『天童密雲禪師語録・年譜』⁽⁶⁾等の文献資料によると、密雲は、宜興の蔣氏であり、萬曆二十三年に、三十歳の時、地元の龍池山禹門禪院の幻有正伝（一五四九～一六一四）によって出家した。数年の修行を経て、幻有の衣鉢を得、臨済正宗楊岐派三十世となったという。圓悟は曾て六つの道場に住持した。即ち萬曆四十五年四月十五日に常州龍池山禹門禪院、天啓三年天台山通玄禪寺、天啓四年五月六日に嘉興金粟山広慧禪寺、崇禎三年三月二十七日に福州黃檗山萬福禪寺、翌年二月十五日に寧波鄞山育王広利禪寺、崇禎四年に再び嘉興金粟山広慧禪寺、そして同年の四月三日に寧波天童山景德禪寺に歴住したのである。崇禎十五年正月十四日に天台山通玄寺に往き、七月七日に示寂した。世寿七十七、僧臘四十七。九月に弟子たちが彼の遺骨をもって天童山に帰り、前山の幻智庵の右の山麓で塔を建立した。密雲が出世して說法二十六年間、無数の人々を済度した。得度の弟子が通寿など三百余人、伝法した弟子は十二人、即ち五峰如学（一五八五～一六三三）、漢月法蔵、破山海明（一五九七～一六六六）、費隱通容、石車通乘（一五九三～一六三八）、朝宗通忍（？～一六四八）、萬如通微（一五九四～一六五七）、木陳道忞、石奇通雲（一五九四～一六六三）、牧雲通門（一五九九～一六七二）、

浮石通賢（一五九三～一六六七）、林野通奇（一五九五～一六五二）である。⁽⁷⁾

嗣法門人如学、道忞、海明等が彼の語録二十巻を編纂し、その後、費隱通容がそれを編纂して十二巻となって刊行流通した。ほかには密雲が『辟妄七書』、『辟妄三録』を著し、それらは法蔵の『五宗原』一書を批判するための書物である。また『辟妄救略説』十巻があり、それは法嗣の法蔵及び法孫の譚吉弘忍（一五九九～一六三八）の『五宗救』を批判する為の著作である。密雲の同門天隱圓修（一五七五～一六三五）があり、圓修の門下に玉林通琇、笈庵通問（一六〇四～一六五五）、松際通授（一五九三～一六四二）等の傑僧を輩出した。また同門には雪嶠圓信（一五七一～一六四七）があるが、しかし彼の伝法弟子と出家弟子に関する記載はない。⁽⁸⁾

密雲門下の人々たちには優れた者が非常に多い。しかも各々一方の道場を化した。⁽⁹⁾但し法門の内部では数々の諍論が起こされ、明末清初の思想界において百年間も継続していた。更に清朝三代目の皇帝である世宗の雍正胤禛（一六七八～一七三五）もかつて『揀魔辨異録』を撰して、天童門派の諍論に参加した。これは史上に前例のない出来事といえよう。

三 費隱における木陳への批判

(一) 費隱とその『費隱禪師別集』の梗概

隠元隆琦等が編集した『費隱禪師語録』四冊十四卷及び『福嚴費隱容禪師紀年譜』上下二卷等の資料によれば、費隱通谷は、福建福清江陰里何氏の子であり、何氏は地元の豪族である。しかし、彼は七歳の時に父親を亡くし、十二歳に母親も亡くした。よって伯叔の手で養われた。十四歳の時に本邑の三宝寺の慧山老師の下で得度した。翌年、師にしたがって福州華林寺に移り住んだ。十八歳の時に浙江、江淮、廬山等に入り、湛然、憨山、博山、瑞白、古潭等の尊宿を遍参し、二十四歳に受具した。天啓二年三十歳の時に、初めて密雲圓悟に吼山で参じて、七下の痛棒を喫したという。崇禎四年七月望日に三十九歳の時に黄檗山萬福寺にて密雲の印可を受け、臨済宗楊岐派三十一世となった。崇禎六年十月十五日、四十一歳の時に、黄檗山の住持となった。崇禎十一年七月二十九日、四十六歳に嘉興金粟山の住持となった。順治三年丙戌秋、即一六四六年十月十一日に、費隱が五十四歳に天童山の住持に迎えられた。順治七年十一月二十七日、五十八歳に徑山寺に転住した。順治十二年二月二十四日、六十三歳で常熟虞山の維摩院に住し、順治十四年六十五歳に、嘉興福嚴禪寺に移住し、順治十八年三月二十九日、六十九歳をもって福嚴禪寺で示寂した。同年十月に、黄檗山天柱峰の麓で塔を建立した。

嗣法の弟子は隠元等六十四人があったという。

上述のように、陳垣の著作の中で「天童派之諍」については、費隱と木陳の間の第一回目の「天童塔銘之諍」には、ただ『費隱禪師語録』第十一巻の内容が援用されている。即ち費隱が鄞県の徐之垣と餘姚の張廷賓に送った書簡の内容のみを引用したのである。しかもわずかに二、三頁の内容しかなかった。

本稿は最新の資料である『費隱禪師別集』第十五巻の中で四篇に亘る内容を使って、費隱が如何に木陳を批判したのか、そして密雲の法嗣の間に如何なる形で兄弟骨肉の争いが行われたかを明らかにする。

『福嚴費隱容禪師紀年譜』の末尾には、『費隱禪師別集』という書物が記載されている。そこでは左記のように述べている。

説法『語録』四冊十四卷及『祖庭鉗鎚録』、『心経斷輪解』、『漁樵集』、『挂瓢集』、『別集』並行於世。⁽¹⁰⁾

『語録』を除き、上述した五つの著作は、費隱存命中に既に単行本として刊行された。⁽¹¹⁾ただしその中での『別集』とは、如何なる内容が収められているのかは、よくわからない。現在見られる『費隱禪師別集』は、五冊十八巻のものであるが、『祖庭鉗鎚録』上篇は巻一、『祖庭鉗鎚録』下篇は巻二に収録されている。『心経斷輪解』は巻十七に収められている。其の他の巻数については、巻三は『費

溪源流頌」、巻四は『金粟辟謬』の上、巻五は『金粟辟謬』の中、巻六は『金粟辟謬』の下篇である。巻七は『規謬見長老』、巻八は『判狂解』、巻九『又判狂解』、巻十も『又判狂解』、巻十一は『室中偶言』、巻十二『黄檗勘語』の上、巻十三『黄檗勘語』の中、巻十三、十四『黄檗勘語』の下篇である。巻十五、即ち本稿が論述する費隱の木陳に対する四篇の批判文『説木陳欺天童老和尚』、『撃木陳妄代天童老和尚付法』、『榜法堂語』、『啓告同門語』、そして巻十六は『原道辟邪説』、巻十七は『心経斷輪解』、巻十八は『雜著』である。

上述した如く、『別集』十八巻の多くの内容は、費隱の同門法兄弟に対する諍論である。たとえば『金粟辟謬』上中下三巻及び『規謬見長老』は、同門の法弟朝宗通忍に対する批判書であり、『判狂解』一卷と『又判狂解』二巻は、師の密雲の同門天隱圓修の法嗣である玉林通琇の論駁である。このような激しい法戦は、先ず曹洞宗湛然圓澄の法嗣瑞白明雪（一五四八―一六四一）と通琇との高峰原妙（一二三八―一二九五）の前後悟道機縁についての論争がこの端緒を開き、火花を散らしたのである。

その後、費隱は法叔の高弟である通琇を批判する為に書を著した。これは通琇が湖州の金車山報恩禪寺で行なった上堂法語についての批難である。そして巻十五の『説木陳欺天童老和尚』、『撃木陳妄代天童老和尚付法』、『榜法堂語』、『啓告同門語』は、木陳に対する論難であり、巻十六中での『原道辟邪説』は、イタリア・カトリック司祭の利瑪竇（一五五二―一六一〇、Matteo Ricci マテオ・リッチ）

への論難である。

しかし『別集』の内容については、陳垣等の研究者たちは皆、了知していなかった。本稿では、費隱が木陳に対する批判の内容以外に論ずることが出来ないが、今後の研究課題とする。

（二）費隱の木陳に対する批難について

崇禎十五年七月七日に密雲が示寂した。その翌年二月十四日に、天童山で密雲禪師の入塔の法要が盛大に行われた。『費隱禪師別集』巻十五「説木陳欺天童老和尚」では、「一月之内、無論遠近老少貴賤僧俗男女与吾法嗣同門有六千余人、一時俱集¹²⁾」と書いてある。こうした盛況の裏で、天童山では費隱と木陳の骨肉の争いの火種をかかえていたのである。その原因は費隱が木陳の先師の位牌の入祖堂や住持入院等の事についての言動に大いに不満を抱いたからである。「説木陳欺天童老和尚」では、費隱は、木陳自らが先師の位牌を祖堂に抱いて入れることに對して左記のように批難している。

汝木陳向用機心、謀取住持、恐無其權、昧却良心。皆不以我言為然、殊不知此番數千余人皆為先大和尚末後大事而集、不因汝木陳住持而來。¹³⁾

当時、密雲の嗣法弟子の十二人の中三人、つまり五峰学、漢月蔵、石車乗の三人は既に亡くなっていたが、費隱は木陳恣、破山明、朝

宗忍、萬如微、石奇雲、牧雲門、浮石賢、林野奇の八人の中で最も早く密雲の法を嗣いだ。儒家の伝統に準ずれば、確かに先師の位牌を入祖堂するなら、一番の兄弟子の費隱が担うのが正しいのであるが、にもかかわらず木陳が密雲の法席を継いだので、費隱に譲るわけにはいかない。それで兄弟の反目を起こして、一門の中で不和が生じた。これについて、費隱が次のように厳しく批難している。

汝木陳不諸名分、亦不遵礼儀。不思数千余人非汝之徒衆、赫奕祖堂、非汝之親構、敢独抱牌位而面南說開示語。以開示先大和尚、亦開示同門尊長、略無忌憚。而手捧牌位对諸尊長肆口漫称山僧、不肯自称法名、此如人子对父親称学生相似、有是理乎。且抱牌說開示語、謂把住即是、放行即是、真個無恥之極。老和尚由汝把住乎、亦由汝放行乎。把住則供養、放行則拋棄、於老和尚分上、容汝如是乎。如此拳止、欺心逆理、背義罔上。分明欺老和尚、欺諸龍天。不惟欺老和尚、欺諸龍天、亦欺同門、並欺数千余人。不惟欺同門、欺数千余人、即天下凡皈依老和尚者、尽皆欺到也。故我此時即欲当天衆前、痛斥汝非、猶念法門所関、惟恐衆人毆汝、故存体面、含忍於懷、不辭即行。且对諸同門兄弟極口說破、使汝聞知、終世不能忘此逆上之罪也。然又不特此抱神主牌說開示語逆上一端之罪、就汝用一片機心、謀初七日以進方丈、插在先和尚入塔期中、要数千余人及我同門各化一方之者、尽皆礼拜皈信、听從於汝也。如有一人不礼拜皈從、則

先用一南源、展威權以撰伏之。拋南源合寺多半称他是狡猾之人、向為先大和尚之維那、現作汝木陳之監院、而私欲為汝法嗣、以深図天童大利。是以陽用維那之權、陰行監院之私、而交併狡猾以加於衆、於理可乎。汝深知先大和尚進塔之事未完、我等与数千余人皆走脱不得、頼此一計、故汝在内深用密機、於外專用南源、一内一外、呼吸相応、表裏相連、逞莫大氣焰、無所不用其極、以撰伏我等皈從、且聽汝之処分也。⁽¹⁴⁾

ここで費隱は、木陳が尊長を軽んじていることを批難している。更に師の位牌を抱いて南に面して説教をすることは、先大和尚から乃至天下の帰信者までを侮辱し、誠に許し難い逆上の罪であると、木陳に痛烈な批判を浴びせている。また南源監院を濫用して大衆に圧力をかけ、天童大利を自分のものとせんとすることを断罪したのである。

しかしながら、当時木陳が天童の主席として、師の密雲の葬送入塔後、再び入院開堂の儀を行うのは、公務遂行の範疇に属することと思われ、木陳が規則を破った行為とか、犯上の嫌いなどには当たらないのではないかと思う。費隱は木陳が天童の住持の位を略奪したと憎み、耿耿としていたと考えられるからである。密雲示寂後、木陳等が大衆を代表として金粟寺に参籠して、費隱に天童の住持を受け入れるように要請したが、しかし当時費隱がそれを固辞している。それ故木陳が密雲の後継者として天童山の住持となった。費隱はこ

れについて左記のように、この一部始終を述べて、木陳を批難している。

茲聞先大和尚示寂之後、天童虛席、汝深欲攫取。遂來操權而繼立住持、只用私意、不遵先大和尚卜籤於韋駄伽藍、不拈闍於護法龍天。恐韋駄伽藍護法龍天、靈不向汝。遂用假意推拳名徳、見十方衲子多景仰於我、汝不得已、齋嘗作書帛到金粟相請、奈我早已炤破汝之心行、自來虛偽、不惟能與人、抑且能奪人、如此交誼、當有禍犯。且因上年縉素中有拟請我風声、而牧公聞得先欲謀此寺住、反妄譏我謀住天童、以鼓大眾、悉皆疑謗、令我不得進前周旋後事。天童大眾多如是說、今若受請、則墮牧公機阱之中。有此二種嫌疑、故終以善辭而却之。惟拳拳推讓云、若論嗣法次序、當請破山、論現在當請汝木陳及石奇兄、以現在未住所故也。若統論則破山、萬如、石奇、牧雲、浮石、林野諸位法兄及汝木陳皆可主此道場。當拈闍卜籤於韋駄伽藍、如拈卜得人、然後發書以請之。即我在通玄與大眾拳立住持亦復如是。纔服同門兄弟、並服天下人之心、亦不昧先大和尚在生公正之策也。¹⁵⁾

費隱が語ったことを文字上から見ると、密雲示寂後、法嗣の中で牧雲、木陳等が皆虎視眈眈として、天童山の住持の位を狙っている。その中では費隱自身にも天童に上る意欲が満ちていたが、しかし内紛があることを憂慮したため躊躇し、当時は進むことが出来なかつ

た。周知の通り、天童山は密雲一門の根本道場である。五山の上位の官寺で、寺格は金粟寺より遙かに上であるので、費隱が止めようとしても止められないことはわかる。ただ当時は同門の牧雲等の仕業に悩まれた末、チャンスが木陳の方へ移り、機会を逸した。木陳はかつて金粟に往き、費隱に請じたが、費隱は「終以善辭而却之」としていた。結局のところは、住持の位は法弟木陳に得られ、費隱の心中は当然不愉快であつた。『福嚴費隱容禪師紀年録』卷上「崇禎十五年壬午条」では、「十一月木陳、石奇二和尚躬至金粟、請師繼席天童、師堅辭之。及密老和尚龕至天童、師特詣礼龕修供¹⁶⁾」と記している。また「十六年癸未条」でも「師五十一歳、正月往天童恭送密老和尚靈龕入塔¹⁷⁾」と記している。木陳の天童の入院には言及していない。木陳と石奇が金粟寺に往つて、費隱を拜請したのは、費隱が法兄であるためだが、然し費隱が固辞した故、他の八人は皆天童山に上る資格がある。費隱が「拈闍卜籤」という方法で住持を決めることは、木陳等は賛成しなかつた。費隱の述べるように、密雲が天童山に入塔の際に、通玄寺の住持を選ぶ時も、こういう方法を使ったという。

密雲の示寂後、通玄寺は林野奇が住持職に就いた。当時の六人は各々一方の道場の主となつたが、ただ木陳と石奇の二人はまだ道場に坐していないので、二人のうちいずれかが天童山の住持になつたとしても、妥当なことであり、批判する理由はないと思う。

木陳が自分の晋山式に因んで、師の密雲の靈骨の入塔式も行い、

同門の師友と大衆の前で説法もしたが、兄弟子としての費隱は、その場で、聊かに不快を覚え、辞せずにして帰った。その後、また批判文を書いて木陳を論難した。客観的に見れば、費隱が暴露した内紛は、あまりにも芳しくないことである。崇禎末年、蛮族が入侵し、内憂外患の苦境の下で、官民とも日に亡国の恐れに苦しめられ、当時の禪門にもその影響が及んだ。

密雲門下の費隱と木陳などの内紛も、乱世に演じられた一種の狂騒曲のようなものであろう。費隱による木陳への批判は、一見して同門の内紛に過ぎないかもしれないが、その深層においては、社会の混乱や人心の離反、そして苦悩と矛盾に呻吟している明末清初の漢人の心象を映しているのである。費隱の木陳に対する批難は、時勢の悪化により、一層激しさが増すのである。その点を次のように書き記している。

汝木陳居此場無恥橫行、則塞天下聖賢往來之路。以致先大和尚靈塔住於寂寞之鄉。凡曾出先大和尚之門、誰不公憤、以排叱汝也。要而論之、汝生平不循本分、我見貢高、尋常肆口自逞文章天下第一、故有如上種々欺先大和尚並欺同門及天下人之罪緣。我亦忝在兄弟之長、見此不言、則亦昧先大和尚莫大之恩。且先大和尚在時於人天衆前、屢稱我為直心直行、有公無私底人。¹⁸⁾

上記の文から見ると、費隱は木陳の非行を激しく指摘してい

る。しかし感情的な内容も見られる。木陳の文才に不満を吐き、所謂「不循本分、我見貢高」、「肆口自逞文章天下第一」などを批判したのである。しかしながら木陳が自ら文章の卓越することを自負していることは、費隱に言われた「欺先大和尚並欺同門及天下人之罪縁」の罪に当たらないことは歴然としている。事実として、密雲の一門の中では、木陳の詩文が最も優れ、書も良くした。それ故、木陳は清の順治帝によって北京に招かれている。費隱が指摘する木陳の罪状はそれだけでは済まなかった。更に第二篇の批判文『撃木陳妄代天童老和尚付法』の中で、木陳の先師の法脈の乱れに言及し、法門の綱紀を破壊するなどの罪を次のように述べている。

独今木陳改号山翁、自誇文章天下第一、固無本分手眼接人。只因天童大利、雖得住持、不能主張、要人幫扶。乃拜結党与、以布私恩。竟以人情而賣法系、故將先師遺下法衣、拄杖並及拂子妄自代付与僧高原等。而謂代先師以付法也。一時傳聞、人皆駭異。不特破從上法系之紀綱、亦且溷乱自來列祖之名位。所謂以訛伝訛、以偽印偽。且一人伝虚在前、衆口藉实在後。則日久歲深、烏焉成馬、魚魯參差。以致影響相襲、假而不歸。盜名欺世徧滿人間。則正宗真脈、面稟親承之者、反為傾奪。而教外別伝一枝真脈、吾知自此而微矣。捫此則木陳真為吾先師法聞中之乱臣賊子。逆師罔上、靡所不至。則現今同門法嗣、並千百世後、口誅筆伐、實無得而辞也。且以世間法而論之、如人子父親亡過、

豈能代得父親又生子乎。又如朝臣、豈可背君而私授人爵祿、名位乎。既朝臣不能私授祿位、人子不可代父生子、則木陳為先師¹⁹逆徒。

上述した内容から見れば、木陳は密雲が遺した法衣、拄杖、扠子等のものを高原等の僧に伝授した。費隱がこうした行為を、先師に代わって伝法したことにあたるので、してはならないと批難した。

これは亡き父親に代わって子を生み、臣下が主君に代わって人に爵位を下したこのような裏切り行為だと批難したが、この批難は少し正鵠を射ていないと感じる。木陳は已に天童山の主となり、第三十一代目の有法の人でもあり、先師に代わって法脈を弟子に遥付する必要はないのではないかと思う。費隱が責めたことは事実かどうか、尚斟酌の余地がある。

また密雲の遺留品も、天童常住のものであり、住持とした木陳の管轄範囲なので、これを信物として弟子に付しても、罪咎は問われないと思われる。費隱が指摘した「破從上法系之紀綱、亦且溷亂自来列祖之名位」とか、「盜名欺世」、「乱臣賊子」、「先師逆徒」などなどの罵りは言い過ぎである。木陳がもし師の密雲に代わって高原に法を授けたことが事実としたら、それも何かの由縁があると思う。また、高原とは如何なる僧であるかという点については、今はその詳細が分からない。但し、木陳が自分の法を嗣がせないことから推測するなら、密雲が度した弟子なのか、もしくは長く密雲に参じた

僧かも知れない。木陳が師の源流を書して高原に付したことに、理由が有ろうかと思われる。これについては、費隱は言及していない。当時、費隱が金粟寺で住持しているが、兄弟子とはいえ、木陳の家事にまで干渉するのは、越権の嫌いがある。

費隱はさらに左記のように木陳の罪過を陳述している。

先師既無遺囑代付。而汝木陳敢妄操此大權而將法衣、拄杖、扠子代付衆僧、豈不是背先師欺罔同門、以仏祖法門重任並龍天幽冥公鑑悉皆迷昧而尽欺到也……既爾尤見木陳溷亂正法眼藏、妄自尊大、肆無忌憚、將歷來仏祖法門紀綱等同兒戲、視我先師及諸同門悉如弁髦。則凡在法門、人人得而攻之、個個當党理辟除……以此開弊竇而啓濫端、千百世法門罪人、非木陳而何。嗚呼、妄代先師付法、並妄誣先師代付源流、塔名二事、又可不明辯、以排擊之耶。²⁰

上述のように、費隱が激しく木陳を排撃し、彼が師に背き、法を代付したことや、法門を乱したことなどの咎を痛烈に非難した。またその文では、師の密雲がかつて龍池山禹門寺に住持した時に雪庭圓信の為に、龍池幻有師翁の法脈を写し上げ、並びにそれらの名を幻有の塔銘の上に刻石したことの経緯を弁明し、今の木陳の代付と径庭なる次元であると述べている。この内容は、恐らく批判された木陳の弁解に対する費隱の反論と思うが、しかしこれらの批判は費

隠からの一方的なもので、木陳側の返答は、現在一切残っていないから知る由もないのである。ここでは、費隱が木陳の行為は、乱りに師の法を代付する咎あるばかりではなく、更に先師への冒瀆の罪にも問われると批難したことが分かる。

費隱と木陳との争いは、四年後の順治三年秋まで続いた。即ち木陳がこの年七月に天童山から五磊寺に転住し、費隱がこの年の十月にやっと念願が叶って、金粟寺から天童山の住持となった時期である。費隱が天童山で晋山後、木陳に更に二篇の批判文を撰した。一つは『榜法堂語』、もう一つは『啓告同門語』であり、木陳が天童に在住四年間のいわゆる「悪行」を公示の形式で公表し、批判したものである。

引き続き、『榜法堂語』の中で費隱が列挙した木陳の罪状を見てみたい。

『榜法堂語』というのは、題名よりその意味が分かる。つまり費隱は天童の法堂の壁に公告の形で掲げて、木陳の種々の非行と、罪名を公表するものである。その文首では次のように述べている。

木陳旧歳与塔院志道師構訟、於狀詞中貶先師為行僧密雲、褒自己為法僧道忞（中略）。然木陳数年来、自称為先師法嗣、又謀住先師如此大刹、深叨莫大恩沢、不思報德酬恩、反用不端心術毀辱先師、不勝指屈……。木陳欺心、只要瞞官、不顧先師在生名德、反如此忤逆毀傷、吾知含血噴天、不惟不能欺滅先師、只

増無量罪過。縱千佛出世、不容懺悔。且於詞中貶先師為行僧、抑見平素梟心、不認先師為嗣法之師、則從前外面装点、稱為先師門人、皆屬大奸大詐。以瞞衆人、饕世竊利養。又捩伊詞中、自褒為法僧道忞、独不思汝道忞法從何來可見、非從上真伝正受法脈、分明是邪魔外道、無本無源之法。既爾則伊早已自擯於先師法門之外……伊既自褒為法僧、独不知法之所在、人人可惧乎。凡在会衲僧、往來龍象應轉相告、報此人系威音王已後、無師自解外道之流、萬勿齒及以辱先師。謹書此鳴鼓共攻之也。順治三年十一月二十八日上密下雲和尚嗣法居長弟子、寓天童方丈通容具榜。⁽²¹⁾

以上の痛烈な言葉を以て、木陳の罪状を追及している。上述のように、費隱が木陳の後に天童山に住持した際に、曾て密雲塔院の僧の志道通辯と紛糾を起こし、よって木陳から追放されたが、そのことに通辯が不満を持ち訴訟を起している。⁽²²⁾ 費隱は臬の衙内より木陳が天童住持職在任中に報告した文状の一紙を借り出し、その内容を調べ、その結果として木陳の「行僧密雲」、「法僧道忞」の表現について、強く批難した。つまりこうした表現は、先師の密雲に対した大きな不敬、反逆であるというのが理由である。また木陳が自ら法僧を称したことは、これは法を無視し、師を侮辱する行為であるから、邪魔の外道の輩であり、懺悔も出来ない暴挙であると罵倒した。自分が一番の兄弟子及び天童山の住持として法榜を掲げて、大衆と

ともに木陳が犯した罪惡を暴露し、批判を加えると論じている。文中の弘光元年は、明の福王の年号でつまり清の順治二年のことである。この公榜は順治三年十一月二十八日に掲げられたが、ちょうど費隱が天童山に入り一ヶ月半である。木陳の公文に称した「行僧密雲」が、師の密雲を貶めたか否か、そして自称した「法僧道忤」が自己褒揚する意図があるかどうか、解釈によって大差がある。ここで木陳の「行僧」とは恐らく師の密雲が天童を中興し、大行、難行、苦行に勤めたことへの褒め言葉にも聞こえるし、「法僧」とは自分が現住として執法、護法、弘法の僧であるという意味も考えられる。普通では、県衙に呈した公牒は、呼称に対する毀譽褒貶の意を挟まないはずである。しかし費隱は木陳を排撃し、先師を貶めたとい、「無師外道之流」と評し、法堂の壁に公示を張った。更に一門を挙げて木陳を糾弾しようとしている。実に針小棒大の嫌いがあるう。しかもこの頃は、木陳が已に天童山を退山して、慈溪の五磊寺に錫を移し、費隱自身が念願した天童の住持職を得た時期に当たる。そうした前後関係を考えれば、本来なら昔のことを煮返す必要はないと思う。しかし費隱はなかなか批難を止める気はなかった。引き続き『啓告同門語』一篇を作って、同門法兄弟の前に木陳が天童在住の四年間における種々の罪状を批難し、更に木陳を密雲の一門から永久追放し、法嗣の名を抹消したいと宣言している。すなわち次のように痛烈な糾弾を行っているのである。

邇上佛祖来源、自曹溪、南岳、下及於先師、三十四世相承法嗣中、曾無如此忘本背源者。入於禪灯、即他宗別派、亦無如此之人。紹其宗譜、独木陳放肆橫行、略無忌憚。欺滅先師、不勝枚舉。今撥其尤、啓告同門、当劃削法嗣之名、勿使玷辱從上宗祖。庶先師現在常寂光中正覺之靈乃得自安也。⁽²³⁾

そして、費隱の『啓告同門語』では木陳の罪状について以下の数条が述べられている。

(1) 欺上の罪である。すなわち「掀翻先師名位、自立扁額」という。費隱が左記のように記して木陳が先師を軽んじていることを批難している。

本県林中尊、諱冲霄、製「法中龍象」一扁、為密雲禪師題、送懸法堂正中。木陳初住時、即卸其扁、抹去中尊之名、為貯穀倉板乃託人、私乞陸太尊紙書「悟無上乘」、將悟字改作示字、做一大扁、写陸太尊諱、為天童寺山翁和尚題。隨懸於先師旧釘扁处。此掀翻先師名位、自立扁額。私以天童寺系木陳已造也。但子坐中堂、父置穀倉、凡有聞見者、寧不慘傷乎。⁽²⁴⁾

しかし、扁額一枚ぐらいを入れ換えることで、師を離反した罪とするのは聊かに言い過ぎといえるであろう。

(2) 「私結人情、妄賣法系」の罪である。費隱が更に左記のよう

に論難している。

木陳初住本寺時、即私結人情、妄賣法系。將先師遺下法衣、拄杖及拂子等件、妄代先師付法与僧高原輩。則其乖張法門、訛為相伝、混濫佛祖源流、以傷單伝直指之宗……然則木陳既稱為先師法嗣、独不諸此法之所在、人人可惧。而突操此柄以啓千百世之偽端、作法門一大罪魁乎。此也当早削法嗣之名矣。⁽²⁵⁾

上述した木陳が妄りに先師に代わって付法したことの罪は、前文において既に述べている。費隱が天童に住持した後、再び批判文を撰し、同門に向かつて木陳を一門から追放するようと宣言している。
(3) 先師語録の原板を毀損し、字義を改竄した罪について、費隱は左記のように述べている。

木陳濫膺名利、亦有上堂、普説及贊頌、偈等、曾集成卷、稱為語録。其欺凌、侮慢、嫖褻、譏刺先師之語、難以指數、罪不勝詰。更先師在日、手刊住本寺单本語録、凡一百四十餘葉、久已流通於世。内与士大夫交際、問道、書示士大夫偈頌、機縁、請主司李、黄元公、檀越徐心章、諱之垣等名。及上堂、小参与禪衲、觀面、扣問、機縁、種々題詠關係、中興一寺始末因縁、俱被木陳尽行割削、並旧存原板亦皆劈毀、從新杜刻一本。所留之語、不滿四十餘葉。又於四十餘葉中、將一切現前字眼、尽以蹊

蹊蹊蹊、荒蕪怪異之字。滿張改換。乖舛鄙陋、使人展卷、譏笑不止……。逐卷隨葉、尽底變幻。殊不知先師主任本分事接人、以本分話、用本分字、隨世流通、更無好異。銜奇穿鑿、播弄人心識者。況先師在世道德隆重、接物利機、一句一字、人人珍為法宝、不敢視作等閑。木陳毀原板、改字義、存心不善。無非要使後來士大夫一見、以為先師不諳文理、如伊訟詞所稱行僧。木陳文章天下第一、亦如訟詞所稱法僧道恣也。掬此辟毀先師著述、不特法嗣之名当除、即木陳語録之板亦当燒毀。⁽²⁶⁾

費隱は木陳が恣意によつて師の語録の原板を毀損し、字義を改竄した種々な過失を排撃し、木陳を法嗣の名簿から除名し、更に木陳がみだりに編集した密雲語録を燒棄することを放言した。

(4) 費隱は引き続き、「狂蕩驕奢、滅礼敗度、賄賂宮謀」などの罪があると、木陳の罪過を左記の通りに暴露している。

木陳於先師入塔之年、遐迹緇素普集有六千餘、供金存庫千零九百、其米荒糧糶物、甚不可算。且用狡計、未入塔前、謀進方丈、使嗣法人等皆走脱不得。而所獲香金亦甚富饒。於是四年内狂蕩驕奢、滅礼敗度、乃以財帛之多、倩人鑽刺於監国、求其呵護、意欲以勢压人、雖被人哄騙、財帛徒捐、籠榮不果。而寺中龍頭拄杖早已刻雕、閤郡緇素、無不恥之。殊不知古來大尊宿、契悟淵洪、修行深邃、道隆当世、名聞朝宇、或得君王瞻礼、或得天

眷褒崇、俱出意外。非由人求、豈賄賂營謀可得。即今木陳清夜自思、何処安放面孔。掘此一端、不循本分、貽羞先代、取笑諸方、亦当洗其嗣法之穢。⁽²⁷⁾

ここでは、費隱が四年前の密雲の入塔並びに木陳の天童晋山のことを提起している。つまり、四衆から金銭や食糧が甚だ多く得られたが、木陳が本分に従わず、常住の財を私利の為に濫用し、更にもって朝廷の官僚に賄賂をしたと批難している。

しかし、木陳がいくら費隱の批難を受けたとはいえ、実際には法嗣から除名も出来ず、その後、天童山への再住も果たされた。更に順治十六年九月に、憨璞性聰（一六一四～一六六六）の推挙によって、同門の通秀に続いて、詔を奉じて、京に入り、萬善殿において、順治皇帝に対して禅法を説示し、帝心を大いに悦ばせ、「弘覺禪師」の尊号を賜わった。

（5）訟詞の中で師を「行僧」として貶し、己を「法僧」として称したという過失である。これについては既に上の『榜法堂語』にて言及したため、ここでは贅述を省く。

その他には、常住の産業を廃棄し、先師の道場を破壊し、同門の名字を抹消し、死んでもいないのに自分の位牌を先覺堂の列に安置し、萬工池（放生池）の石畳を損害し、風水を大いに破損した等々の罪状を列挙し、厳しく木陳を論難した。⁽²⁸⁾

費隱が木陳の種々の罪過を批判し、末文に左記のように結語を述

べている。

掘此木陳深毀先師一代住持功業、不惟一寺風水不可鎮、而衰落之相頓見眼前、龍天豈不見過。惟有如上種々孽行、故天理不容。於先前年妄代付法、則天雷霹西禪堂兩歩柱、而山靈亦不擁護、即旧歲訟詞、写先師行僧時、猛虎便跳入大齋堂、噉食一犬。更有許多不祥裁異迭見、使渠不能自安。衆也一時星散、此番退院、實是龍天驅遣出山、然則割削嗣法之名、亦系龍天有意、使吾輩必行之也。嗣法之名既鑿、則祖師之位斷難並列、不則六十六代同堂先覺、誰其尊信。

既述のように、費隱は木陳が天童に住持した四年間に行った非行を批難した。これはあくまで費隱側の一方的な論説に過ぎないが、木陳側の回答についての資料は全く残されていないので、当時の論争の実情は知る由がない。然し、費隱が指摘した「風水不鎮、龍天不佑、山靈不護、天打雷霹、猛虎噉犬」等の不祥の兆を以て木陳の罪を問うことは、かなり主観的、感情的、過激的な内容であったことは否めない。また一門が協力して、木陳の嗣法の名を削除し、祖堂から位牌を撤去しようとするまで叫んでいる。こうした骨肉の争いを激しく演じたことについては、実に驚きに禁じえない。

四 結 論

上述のように、本稿は主に『費隱禪師別集』巻十五の中で、費隱が木陳を糾弾する四篇の批判文を対象にその内容を論じたものである。要するに十七世紀四十年代の間に明末清初における天童派密雲の法嗣たちの間に起った僧諍の一部を明らかにする目的を持つ。

『別集』は、これまでずっと学界の諸先達の視野の中に入っていなかった。それ故に本論は、この文献資料を披瀝し、この研究の空白を埋めることに繋がると考える。

当然ながら、取り上げた資料は費隱が撰述したもので、裁判に例えれば費隱が原告であり、木陳は被告として批難されているものである。木陳側の反応及び弁解などは不明であり、恐らく現存していない。もし今後、そうした資料が発見されるなら、前後の事情や論難の行方について、もう少し究明されると思われる。⁽²⁹⁾

いずれにせよ、費隱の木陳への糾弾と批難が公正であるかどうかは、なお今後の研究によって、様々の歴史観や宗教思想などの側面から考察する必要がある。しかし、筆者はこれがあくまで明末清初という変革期において、天童密雲の門下たちが起した内紛と思う。というのは、密雲派は多くの優秀な法嗣が輩出し、各自に異なる政見と処世観を持ち、国と民族の存亡の危機において、各自に自分の選択と野望を抱いていると考えられるからである。それ故、木陳が

批判されても、彼と一部の門流が当時の新たな清朝の為政者に接して、自分の生存空間を獲得した。さらにその十余年後、北京に入り、清の皇帝から大いに歓迎された。明王朝の滅亡によって、満州族が清国を建設したという当時の政治情況が非常に不安定であり、民心を安定させる為、清王朝は明の官人士大夫たちを籠絡すると同時に、宗教界などの一部エリートも籠絡しようという国策があった。順治皇帝が天童密雲門下の名僧を続々に入京させたのも、その現れの一つである。たとえば、玉林琇、木陳忞等の名僧を上京させ、入内させて法を問ひ、国師、禪師号、または紫衣を下賜している。さらには皇帝が彼ら高僧の弟子を自称したこともあった。仏教信仰を通して、多くの漢民族の民を服従させる意図があったのであろう。宗教などを利用して、南明を徹底的に殲滅し、江南地区を安定するという怀柔政策も実施されている。

費隱による木陳等への排撃も、こうした非常時期に発生した内紛である。これには、費隱の政治立場と性格がよく現れていた。彼は明の道統を崇敬し、時流に従わない人物であった。明の滅亡に大きな苦痛と幽憤を感じていたのである。曾て密雲の会下で七回の痛棒を喫した彼は、臨済の棒喝の宗風を継承している。彼の峻烈さには師の密雲を超えるところもあった。一方、木陳は学者タイプの僧であり、かなり柔軟な性格と処世法をもっている。

費隱の性格については、崇禎十六年の春、烏程の唐世濟が題した『費隱禪師語録』『金粟費大師語録序』において、「列刹相望、而邇

厥亨衢、実自天童老人辟之、老人有堅剛之骨、荷担斯道、重以德業純備、故龍象闡駢、得人為最。出其門者、縱橫展演、各不相襲、各自建立法幢、而金粟費大師、尤為烜赫。大師說法利生十有余年、每垂片語、皆足為人解粘積縛……蓋純拈向上、流自胸襟、決不肯以一滴惡水塗汚学人、即有時鉗鎚所被、如奔流、度刃、電激、雷訇、凜乎可畏。⁽³⁰⁾とその性格が活写されている。彼の在家嗣法弟子である王谷も費隱の言葉は兵家の用武の威があると指摘し、⁽³¹⁾もう一人の弟子呉岱もそのように論じている。⁽³²⁾

陳垣の『清初僧諍記』では、清初の仏教界の対立は、明朝遺民と貳臣の間の対立と構造が同じであると論じている。陳氏は遺民派の代表格黄宗羲と継起儲弘等を聖人君子として高く評価し、貳臣派の錢謙益と木陳等を悪人と軽視した。当初清の王朝に招かれて応じず、最後仕方なく清の皇帝に従っていた通秀を中間的な位置に置いている。木陳が貳臣に判定されたことに対しては、なお今後再考する必要があるのではないかと、筆者は思う。だが、費隱及びその弟子の隠元たちは、確かに天童密雲派の中で、比較的に遺民派の思想傾向に近い人々である、と考えてよいのであろう。

その意味でこの諍論は、明から清へと政権が移行する前後の中国仏教界における政治的、民族的な倫理観、道德論、とりわけ忠と姦華と夷、義と利などの争い及びその立ち位置の相違を行ったことである。

つまり理想的な儒教の忠節を遵守するか、それともより現実的な

時流に合わせ、さらに異民族の王朝に仕え、為政者に迎合するか、という処世観をめぐる対立もふくまれていることをも意味しているのである。

注

- (1) 陳垣『明季滇黔佛教考』卷二「法門之紛争第五」二七五頁（河北教育出版社、二〇〇〇）では、紛争之興、自崇禎間漢月藏著『五宗原』、密雲悟辟之始、是為宗旨学説之争、上焉者也。順治間費隱容著『五灯厳統』、三宜孟（明孟）（一五九九―一六六五）、曹洞宗湛然圓澄（一五六一―一六二六）の法嗣）訟之、是為門户派系之争、次焉者也。有意氣勢力之争、則下焉者矣。有墓地田租之争、斯又下之下矣」と記している。

- (2) 陳垣の『清初僧諍記』卷二「天童派之諍」三四―三六頁（中華書局、一九六二）援用した『費隱禪師語録』卷十一では、費隱が甲申（崇禎十七年、一五四四）の夏に「与侍御心韋徐居士」、「与鄞縣広文客卿張居士」等の書簡の中に先師密雲塔銘及び木陳が妄に先師の代わりに伝法等のことを記している。当時天童山を住持していた木陳に猛烈な批判を行った。

- (3) 野口善敬の『訳註 清初僧諍記―中国仏教の苦悩と士大夫たち』（日本中国書店、一九八九）を参考する。連瑞枝の「錢謙益的佛教生涯与理念」〔『中華佛学学报』第七号、一九九四、中華佛学研究所〕、「漢月法蔵与晚明三峯宗派的建立」〔『中華佛学学报』第九号、一九九六、中華佛学研究所〕及び釈聖空の「試析雍正任揀魔辨異録」中對漢月法蔵的批判」〔『中華佛学研究』第五号、二〇〇一、中華佛学研究所〕を参照。

- (4) 陳垣の『清初僧諍記』「徵引数目略」（九二―九三頁）による。

- (5) 木陳、広東潮州茶陽林氏の子であり、字は道恣、山翁と号した。早くも儒業をしたが、弱冠に及んで大慧語録を読むによって、前生の縁を感じ、遂に廬山開先寺に往き、若昧智明の下で出家した。後に父母の敕命によって、還俗して子宝を得た。二十七歳に再び出家し、憨山德清の座下で受具

した。その後金粟、天童において密雲圓悟に参じて十四年、金粟寺において密雲の衣鉢を受け、臨濟三十一世となった。崇禎十六年天童山を住持し、四年後転住し、慈溪の五磊、越州の雲門、台州の広潤、越州の能仁、湖州の道場、青州の法慶等の七つの名利を歴住した。その後再び天童山の住持となり、其の間、順治十六年に奉詔して京に入り、「弘覺禪師」という禪師号を賜われた。其の中の事蹟は『奏對錄』三卷、「弘覺恣禪師北游集」六卷等を具に知られる。道忞は京から南に帰して、天童の住持職を辞して、紹興の化鹿山の平陽明洞山に往き、そこが終焉の地を悟って、自ら黃龍峰で塔を起こしたという。その開山となり、康熙十三年六月二十七日に入滅し、世寿七十九、法臘五十五。道忞は九つの道場を坐して、大きな名声を有した。『弘覺恣禪師語錄』二十卷、『布水臺文集』三十二卷、と『五宗辟』一卷等を残した。

(6) 駒澤大学図書館が所蔵『天童密雲禪師語錄』十二卷本(全七冊)を参照。京都貝葉書店、昭和八年(一九三二)一月に刊行。

(7) 因に現在天童寺が所伝する密雲圓悟の臨濟宗法派は三十一世林野通奇の門流である。筆者等は四十三世となる。

(8) 雪嶠圓信は出家弟子がいまいだが、しかし二人の在家弟子があり、一人は江西の黃伯端(字は元公、海岸と号した。一五八五〜一六四五)金陵にて明国の為に殉難した。もう一人は徐啓叔(字は聖思、僧名は近公洪節、?〜一六四五)、浙東にて国難に死す。時に「双瓣香」と称揚された。陳垣『清初僧諱記』卷三「雲門雪嶠塔諱」六三〜六七頁を参考する。雪嶠の嗣承については、木陳が崇禎四年に出版した『禪灯世譜』及び費隱が順治十年に出版した『五灯厳統』では、ともに「嗣法未詳」と記されたが、その原因は、おそらく雪嶠が崇禎八年に徑山、崇禎十三年に廬山開先寺の二度の晋山開堂した際に、雲門遥継の報恩香だけを焼した。しかし崇禎十六年に東塔寺の晋山開堂の時に、方に龍池幻有の嗣法者を称して報恩香を焚いた。因に以前、密雲が龍池禹門寺を住持した際に曾て雪嶠が幻有の源流を代筆したという。圓悟密雲の入塔は崇禎十六年二月十四日であるが、

『費隱禪師別集』卷十五では、「不意徑山雪庭(嶠)師不請自来、殷勤弔慰、雖安遙嗣雲門之宗、猶認曾在龍池起過法名、与先大和尚同為昆季。我等一時見他好心而来、抑亦好心相向、遂議請為起龕封塔之主。此固彼此人情、一時交際、信無過也」云々と記している。雪嶠の嗣承については同卷の一三〜一六頁にも論及されている。具に野口善敬の『清初僧諱記』訳注の一八八頁の註一八三及び二〇四頁の註二九五、二九八の内容を参照。

(9) 密雲の法嗣の一人の漢月法蔵が創立した三峰派は、江南における天童派と雁行した一大禪門であり、大きな勢力を形成した。然れば費隱通容の法嗣である隠元隆琦は、清の順治四年(南明永曆八年、一六五四)に門下の弟子たちと鄭成功の船舶を便乗して日本に渡った。後に日本黄檗宗を開創した。具に林観潮の『臨濟宗黄檗派与日本黄檗宗』(中国財富出版社、二〇一三年三月第一版)を参照。

(10) 駒澤大学図書館で所蔵する清代の版本『費隱語錄』四冊本(刻版年月など未詳)がある。第四冊の二三頁左丁を参照。

(11) 『費隱禪師別集』卷一「祖庭鉗鎚錄」の文首には、費隱の在家弟子である大舍居士山陰王谷が崇禎十二年己卯に書いた序文を収録している。王谷は密雲の法孫として費隱が編纂した『天童密雲禪師語錄』卷十二の中に「行狀」を撰述している。他には費隱が示寂後、『福嚴費隱容禪師紀年録』上下両巻の編纂を参与した。然れば巻七中の「規謬見長老」では、費隱が自序の文では、「山僧於甲申年規謬見長老書一冊刻出、將為朝公從此以後能返謬归正、捨妄從真。迄今已丑仲夏猶見朝公復為山僧指迷若干段、且聞朝公於去歲孟冬已死、尚留邪說流毒人間。則其雖死、而邪心還不死也。然其人寿命尚未艾、既已死矣。亦見龍天不容、則亦不足与較、但恐後來人受其誑惑、而迷背正法眼藏、塗汚本来面目、宗門底事一時毀滅、為害不為不深。故又万不得已、再規謬見長老教語、以結其案也」(第七卷第二十七頁左丁〜二十八頁右丁を参照)とある。その中の「朝公」や「謬見長老」とは、費隱通容の同門法兄弟の朝宗通忍を指している。通容は崇禎十一年戊寅七月二十九日に、四十六歳の時に金粟山広慧禪寺に晋山入院した。在住

の間に『金粟辟謬・上』、『金粟辟謬・中』、『金粟辟謬・下』合三卷（第二冊）を撰述し、朝宗通忍が説かれた臨濟宗旨は先師に背けたものと批難した。また『規謬見長老』での甲申は崇禎十七年、つまり通容五十二歳、金粟に住持して第六年目となる。己丑は清の順治六年であるが、朝宗通忍は一六四八年の孟冬に死す。通隠と通忍との論争は約十年の間に持続した。通忍が死した半年後、通容が通忍の死ぬ直前の書簡を接し、その中は通容の見地を指摘した。通忍は已に死したので、そもそも論争は終焉してもよいであろう、しかし通容は止める気が無く、死んだ法弟の通忍に「再規謬見長老数語、以結其案也」という返事を送った。その執念の深さが驚きに禁じないのである。『紀年録』下巻では、その時、費隠が木陳の後に天童に転住する頃であると記している。

- (12) 『費隠禪師別集』卷十五、一頁右丁を参照。
- (13) 同書、二頁右丁を参照。
- (14) 同書、二頁右丁～三頁左丁を参照。
- (15) 同書、八頁右丁～一〇頁右丁を参照。
- (16) 『費隠語録』第四冊、『福嚴費隱容禪師紀年録』卷上、二四頁左丁を参照。
- (17) 同書、二五頁右丁を参照。
- (18) 『費隠禪師別集』卷十五、一〇頁左丁～一二頁右丁を参照。
- (19) 『費隠禪師別集』卷十五、一一頁左丁～一二頁右丁を参照。
- (20) 同書、一二頁左丁～一六頁右丁を参照。
- (21) 同書、一六頁左丁～一八頁左丁を参照。
- (22) 同書、二二頁左丁。『啓告同門語』では費隠が木陳の訟詞を公表し、つまり「天童古刹、年久荒圯、行僧密雲会同合郡仕紳、重勸。因雲坐化、衆僧瘞骨撐塔、令僧通辯看守、詎料辯滅師貌法、改瘞塔為私室、鯨踞敗規。法僧道忤鳴衆公逐、隨即辞事出山」と、ある。
- (23) 同書、一八頁左丁～一九頁右丁を参照。
- (24) 同書、一九頁右丁～左丁を参照。
- (25) 同書、一九頁左丁を参照。

- (26) 同書、一九頁左丁～二二頁右丁を参照。
- (27) 同書、二二頁右丁～左丁を参照。
- (28) 同書、二二頁左丁～二六頁右丁を参照。
- (29) 『費隠禪師語録』第四冊、『福嚴費隱容禪師紀年録』卷下、一四頁右丁、順治十二年乙未条では、「十月道場山木陳和尚以魯蘭白纈遣法嗣天城嵒候」云々と記している。木陳側からは費隠との関係は断絶していなかったことが分かるのである。

- (30) 『費隠禪師語録』第一冊「金粟隱大師語録序」一頁右丁～左丁を参照。
- (31) 『費隠禪師別集』第一冊、卷一「祖庭解鉗鉗録序」一頁右丁～左丁では、「費隠禪師、為人縦横、殺奪純用此味、如宿将登壇、指揮之間、威加萬里……突突逼人、如李光弼代郭子儀、於朔方營壘、士卒靡戰無所更、而一号令之、氣色鮮明、云禪人謂之韜鈴、信不誣也」と、費隠のことを褒め讃えている。
- (32) 同書、「費隠禪師別集總序」二頁左丁～四頁左丁では、「木陳欺老人、則説妄付則擊、示榜法堂、啓告同門、和尚豈好辯哉。夫兵、凶器也、不得已而用之。攻其瑕、堅祖道之垣牆、誅其逆、尊師門之模範、亦甚不得已矣……近見踞曲床者、相与唯諾修候、曰法無諍。設我和尚而亦修唯諾、表無諍、也安得濟道日月重光、江河共沛、永靖法地狼煙、我國晏然千秋哉」と解釈している。